銀桜

岐阜東高校　2年　早野　圭祐

川に沿って植えられた桜は、みな天を仰ぎ、その枝の先には蕾がぷっくりと膨らんでいる。この村の役人が計画し、村が一丸となって植えた桜の木々はもうじき咲こうとしていた。

私と無二の友人も参加した。彼は体が細い私とは対照的に、がたいは大きく、肉付きもしっかりとしている。私は昔から姿も異なる彼と、遊ぶのも叱られるのも一緒だった。そんな彼も、桜の開花を楽しみにしていた。

そしてその日は来た。心も溶かしてしまいそうな美しい花は、大きな傘を作り私たちを包む。空をも覆い隠すそれらにみなは感嘆の声を上げるが、一瞬で場が氷ついてしまった。何百もある木々に交じって、一本だけ白い花を咲かせる桜があった。せっかくの景観を崩したその桜を農民らは憤るどころか、何かに畏怖したように顔を青白くした。

だが、私の友人だけは違った。それを見た途端、彼の頬はさらに赤みを増し、息も荒くなっている。まるで、新しいおもちゃを手に入れた子供のように。

彼はその桜を『銀桜』と呼び、家の手伝いもせず、ただ一日中その木を眺めていた。初めはすぐに飽きるだろうと思っていたが、花が散るまで見続けたものだから、さすがに本気で惚れているのだと考える者もいた。

実に浪漫的な話ではあるが、それを心地よい物と思わない者もいた。その内二人は彼の両親だ。桜が咲くたびに息子が手伝いもせず、跡取りなのに、惚れた相手が桜なんて、がんと認めるはずがない。そしてその桜は他と違って、雪のように花が白いのだからなおさらだ。

もう一人は私自身だ。彼と会う数も日に日に減り、会っても『銀桜』のことしか話さない。平然な顔をして接しても、心の奥底では嫉妬心が根強く芽生え始めてきた。

彼の周りの関係が冷たくなっても、彼の『銀桜』への思いは強まる一方だった。

ある日、『銀桜』は呪いによって生まれたという噂が流れた。ただでさえ桜自体を恐れていた農民らは、呪いが絡んだ瞬間、ぽつぽつと村から出ていった。とうとう役場も『銀桜』を切り倒すことを決めた。私の友人だけ、役場に乗り込んだり、木の前で座り込んだり、必死に守

ろうとしたが、満身創痍で家に帰るのがおちだった。せめてもの情けなのか、切り倒す日を咲き終わった翌朝にしたが、それでも彼はちっとも救われなかった。

私はあれから彼を見なかった。川へ水を飲みに行ったとき、偶然にも彼と会った。何日も食べていないのか、あの逞しかった体は、私よりも痩せ細って肋骨が浮き出ている。おまけに風呂にも入ってないのか、髪は油で艶めき、垢だらけの体からはひどい悪臭が漂った。久しぶりにあった彼にまず、川で体を洗ってこさせ、持ってきた草餅をあげた。よほど腹が減っていたのか、何度も詰まらせながらも平らげた。それからしばらく間を開け、とうとう彼は語った。そこからは、彼らしくない弱弱しく枯れた声だった。

愛する『銀桜』への思い、農民への憎しみ、そして私への謝罪。聞いているだけで同情してしまい、気づけば私は、涙で膝を濡らしていた。顔をぐしゃぐしゃにしながらも、私は彼に諦めるように説得したが、すでに彼もこのことが無駄であると悟っていた。だが、あきらめが悪いのか、それでも『銀桜』への愛が勝ったのか、彼は止まらなかった。

さらに数日後、桜が散り終わる夜、つまり『銀桜』の最後の夜がやってきた。私は心配になり様子を見に行ったら、やはり彼がいた。酒を滅多に飲まない彼は、桜の根元で一瓶の酒を煽り――、つぶやきながら泣いていた。今まで弱いところを見せなかった彼が、桜の影の下で泣いている、そんな姿を見て改めて胸を締め上げられる。雲で隠れた月が顔を出したその時、彼の目の前に白い靄が現れた。信じられないことに、その靄は美しく華奢な女性になったではないか。この桜のように色白い肌に、白浄衣を着たその女性は、地から浮いていた。この時ばかりは、顔を伏せていた彼も腰を抜かしていた。私は怖くなり、とうとう逃げて行ってしまった。

そしてとうとう夜が明けた。農民らが『銀桜』を囲む中、力自慢の男らによって切られ始めた。友人はとうとう何もせず、徐々に切られていくのをじっと見ていた。何も映っていないかに見える目からは一滴の涙さえ流れなかった。そして倒れる瞬間、彼はぐっとこらえ、背を向けて帰った。

切り株まで掘り起こされた後、お祓いを済ませてもらい、農民らは安堵した。彼は昨夜の女性も話してくれず、ただふらついた歩きで家へ帰って行った。

そして彼は消えた。最後に見たものは、夜遅く、何も持たない彼が山の中へ入って行ったことだけだった。今も、彼がもうない桜の前にいる気がする。